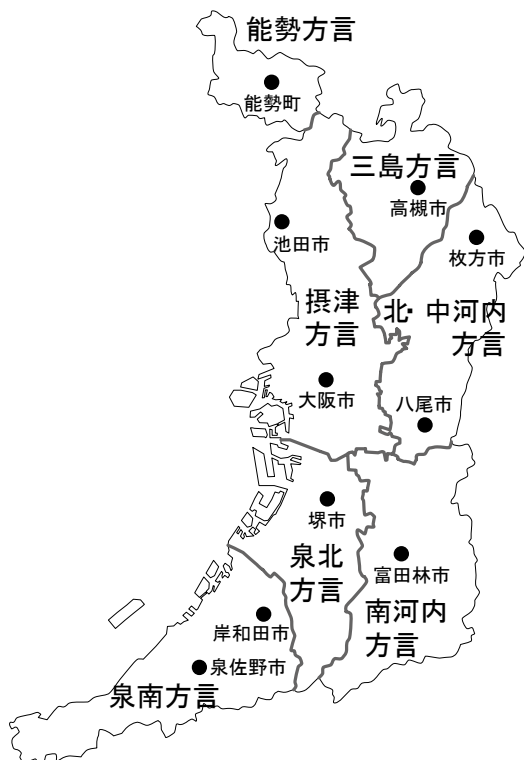


## 大阪府方言

【調査概要】本稿の記述は、基本的に八尾市(区画図参照)に生育した筆者(1987年生まれ)をもとに行っている。用例は、昔話資料から引用した(用例出典参照)。



大阪府方言区画図

【大阪府の方言区画】大阪府の方言は、旧国別をもとにした「摂津方言」「河内方言」「和泉方言」と分けられ、さらに分かれて上の図のような7つに区画されることが多い。しかし、その面積の狭さや、大阪市を中心とする交通網の発達などにより、府内で方言が大きく異なるということはない。その中でも、和歌山県に隣接している泉南方言は、和歌山方言との類似性が指摘されるが、それでもやはり大阪府下において大きな方言の違いは見られない。

大阪府は、経済や産業において近畿地方の中心地であり、そのため、人の出入りが激しく、それに伴ってことばの変化も激しい。特に、単に共通語化するのではなく、共通語の影響を受けて独自の変化を起こしていることがこれまでに指摘されているが、活用に関わる最近の変化については、本稿で言及することができる。

## 大阪府方言の活用表

《動詞》

活用形		類別			
		a類 書く	b類 見る	来る	する
終 止 類	断定非過去	カク	ミル	クル	スル
	断定過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	命令	カケ カキー カキ	ミロ ミー	コイ キー	シロ セー シー
	禁止	カクナ カキナ	ミルナ ミナ	クルナ キナ	スルナ スナ シナ
	意志	カコ(ー)	ミヨ(ー)	コヨ(ー)	ショー
	推量	カクヤロ(ー)	ミルヤロ(ー)	クルヤロ(ー)	スルヤロ(ー)
接 続 類	連体非過去	カク	ミル	クル	スル
	連体過去	カイタ	ミタ	キタ	シタ
	中止	カイテ	ミテ	キテ	シテ
	仮定	カイタラ	ミタラ	キタラ	シタラ
派 生 類	否定	カカヘン カケヘン カカン	ミーヒン メーヘン ミン	ケーヘン キーヒン コーヘン コン	セーヘン シーヒン セン
	丁寧	カキマス	ミマス	キマス	シマス
	使役	カカス	ミサス	コサス	サス
	受身	カカレル	ミラレル	コラレル	サレル
	可能肯定	カケル ヨー カク	ミレル ヨー ミル	コレル ヨー クル	《デキル》 《デケル》 ヨー スル
	可能否定	カカレヘン ヨー カカン	ミラレヘン ヨー ミン	コラレヘン ヨー コン	《デキヘン》 《デケヘン》 ヨー セン
	尊敬	カキハル	ミハル	キハル	シハル
	親愛	カキヤル	ミヤル	キヤル	シヤル
	軽卑	カキヨル	ミヨル	キヨル	シヨル
	継続	カイトル カイトル	ミテル ミトル	キテル キトル	シテル シトル
	希望	カキタイ	ミタイ	キタイ	シタイ
	のだ	カクンヤ カクノヤ カクネヤ カクネン	ミルンヤ ミルノヤ ミルネヤ ミルネン	クルンヤ クルノヤ クルネヤ クルネン	スルンヤ スルノヤ スルネヤ スルネン

a類動詞の基幹音便形

語幹末子音	語例	活用形例(過去形)	作り方
k	書く kak・u	カイ-タ	kをiにする。「行く」ik・uはkをQ(促音)にし「イッ-タ」。
g	嗅ぐ kag・u	カイ-ダ	gをiにする。-タが-ダになる。
s	出す das・u	ダシ-タ	音便形をとらず、基幹イ段形を用いる。
t/c	立つ tac・u	タッ-タ	t/cをQ(促音)にする。
n	死ぬ sin・u	シン-ダ	nをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
b	飛ぶ tob・u	トン-ダ	bをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
m	飲む nom・u	ノン-ダ	mをN(撥音)にする。-タが-ダになる。
r	切る kir・u	キッ-タ	tをQ(促音)にする。
w/	買う ka(w)・u 誘う saso(w)・u	コー-タ サソ-タ	wは(子音なし)に。wの前の母音がaの場合はoに変える。 基幹が1拍の場合は長音化する。

《形容詞・形容名詞述語・名詞述語》

		赤い	静か(だ)	学生[ガクセー](だ)
終止類	断定非過去	アカイ	シズカヤ	学生ヤ
	断定過去	アカカッタ	シズカヤッタ	学生ヤッタ
	推量	アカイヤロ(ー)	シズカヤロ(ー)	学生ヤロ(ー)
接続類	連体非過去	アカイ	シズカナ	《学生ノ》
	連体過去	アカカッタ	シズカヤッタ	学生ヤッタ
	中止非過去	アカーテ	シズカデ	学生デ
		アコ(ー)テ		
中止過去	アカカッテ	シズカヤッテ	学生ヤッテ	
仮定	アカカッタラ	シズカヤッタラ	学生ヤッタラ	
派生類	否定	アカナイ	シズカデナイ	学生デナイ
		アコナイ	シズカヤナイ	学生ヤナイ
		アカイコトナイ	シズカヤアラヘン	学生ヤアラヘン
		アカイコトアラヘン	シズカヤアレヘン	学生ヤアレヘン
アカイコトアレヘン		シズカ(ト)チガウ	学生(ト)チガウ	
なる	アカ(ー)ナル アコ(ー)ナル	シズカニナル	学生ニナル	
丁寧	アカイデス	シズカデス	学生デス	
のだ	アカインヤ アカイノヤ アカイネヤ アカイネン	シズカナンヤ シズカヤネヤ シズカヤネン	学生ナンヤ 学生ヤネヤ 学生ヤネン	

1. 動詞の活用の特徴

(1) 活用型と語類の対応

a類動詞(五段動詞)は 型、b類動詞(一段動詞)は 型と 型r、「来る」は 型kと 型r、「する」は 型sと 型rの活用型を持つ。

b類動詞「見る」のうち、型rは共通語とほぼ同じだが、命令形において、型r「ミロ」だけでなく 型の「ミー」が存在する。

「来る」は、共通語と違って仮定形「クレバ」が存在しないため、「クレ」という基幹は当方言にはない。

「する」は、命令形に 型sの「セー」「シー」がある。また、禁止表現に「スナ」が用いられ、型sの基幹に「ス」が存在する。以上のことから、共通語に比べて、「する」の 型s化が進んでいると言えるだろう。

(2)各活用形の特徴

〈断定非過去形・連体非過去形〉

断定非過去形と連体非過去形は同形で、「書く」「見る」「来る」「する」はそれぞれ「カク」「ミル」「クル」「スル」となる。l 型 r の動詞、例えばトル(a 類)・ミル(b 類)・クル・スルなどが、子音 d, n, m で始まる接辞・形式名詞に接続する場合、次の例のように「ル」が「ン」になることがある。

- ・こっから勝手にとんで。(こっから勝手に取るよ。)
- ・「正月のもちい、どないすんねん。」(正月の餅、どうするんだ。)(大阪・「カモの恩返し」)

断定過去形・連体過去形

断定過去形と連体過去形は同形で、a 類動詞・「来る」「する」の 型イ段・音便基幹および b 類動詞の 型基幹に「タ」を後接させた形になる。「書く」「見る」「来る」「する」はそれぞれ「カイタ」「ミタ」「キタ」「シタ」となる。

表に示したように、a 類動詞の場合、語幹末子音が s の場合を除いて、過去形を作る際には音便基幹をとる。中でも、語幹末子音が w ( ) の動詞のうち、「買う」(kaw > ko) のように音便基幹が 1 拍の動詞は「コータ」のように長音化する。「もらう」「笑う」など、音便基幹が 2 拍以上になる場合、長音化は基本的に起こらない。

- ・けれども、そのときは、それを買うだけのお金がないので、お店でもらうこづかいやおつかいに行ってもらっただちんをためておいて、長い間かかって、そのお面をこうたそうや。(けれども、そのときは、それを買うだけのお金がないので、お店でもらう小遣やお使いに行ってもらった駄賃を貯めておいて、長い間かかって、そのお面を買ったそうだ。)(大阪・「鬼の面」)
- ・たなばたは、勝ったし、ようけごほうびをもろたし、喜びいさんでくにへ帰りよった。(たなばたは、勝ったし、たくさんごほうびをもらったし、喜びいさんでくにへ帰りやがった。)(大阪・「力士たなばた」)

命令形

命令形には、「カケ」「カキー」(a 類動詞)、「ミロ」「ミー」(b 類動詞)、「コイ」(来る)、「シロ」「セー

(する)があるが、それとは別に、 型イ段形・型基幹(連用形)に由来する「カキ」「ミー」「キー」「シー」がある。b 類動詞「見る」では、本来の命令形である「ミー」と同音になるが、アクセントが異なる。本来の命令形は頭高型(高低)で、連用形由来の命令形は平板型(高高)である。

- ・「なんや、なんでも言うてみい。きいたるさかい。」(何だ、何でも言ってみな。聞いてやるから。)(大阪・「へびむこ入り」)
- ・「うるさいやつやな。しずかにせい言うたら、しずかにせんか。」(うるさいやつだな。静かにしろと言ったら静かにしろ。)(大阪・「犬鳴山のはなし」)

禁止形

禁止形は、断定非過去形に「ナ」を後接させて作る。「とる」「見る」「来る」「する」のように、断定非過去形の末尾音が「ル」になる動詞の場合、末尾の「ル」が「ン」に変化し、「トンナ」「ミンナ」「クンナ」「スンナ」のようになることもある。なお、「する」のみ、 型 s の基幹に「ナ」が後接した「スナ」という形がある。

また、 型イ段形・ 型基幹(連用形)に「ナ」を後接させて作る形もある。この場合は「ヤ」をさらに後接させて「カキナヤ」「ミナヤ」「キナヤ」「シナヤ」となることが多い。

- ・いらんこと{するな/すんな/すな/しな} (余計なことをするな。)

意志形

意志形は、共通語と同様に「カコー」(オ段基幹長呼)「ミヨー」( 段基幹+ヨー)「コヨー」( 型 k オ段基幹+ヨー)となるが、長呼せずに「カコ」「ミヨ」「コヨ」となることが多い。また、「する」は「シヨー」ではなく「ショー」である。これは「セウ」に由来すると考えられるが、他の類の動詞と同様に「シヨー」を想定し、それが縮約したものと記述できる。

- ・「こりゃ、たいへんなことになったぞ。どないしょう、えらいこっちゃ。」(これは、大変なことになったぞ。どうしよう、大変なことだ。)(大阪・「大阪城の大トラ」)

また、「来る」は、補助動詞として使用される場合に限って「行ってコー」のように「コー」という形

をとることがある。

- ・来年もまたここ{こよー/xこー}(来年もまたここに来よう。)
- ・今のうちにお風呂行って{こよー/こー}(今のうちにお風呂に行ってください。)
- ・「どうかして、あのもちをぬすんでこう。」(どうかして、あの餅を盗んでこよう。)(大阪・「もちあらそい」)

#### 推量形

推量形は、断定非過去形に「ヤロ(ー)」を後接させて作る。「カクヤロ」のように長呼しないことが多いが、どちらでも構わない。

#### 中止形

中止形は、a類動詞・「来る」・「する」のイ段または音便基幹、およびb類動詞の型基幹に「テ」を後接させて作る。a類動詞がとる音便基幹は過去形と同様である。

#### 仮定形

仮定形は、a類動詞・「来る」・「する」のイ段または音便基幹、およびb類動詞の型基幹に「タラ」を後接させた形のみで、共通語で「バ」「ト」などに相当する場合も「タラ」が用いられるのが普通である。

#### 否定形

否定の接辞には、「ン」「ヘン」「ヒン」の3種類がある。a類動詞の場合、「ン」はア段の基幹に後接し、「カカン」となる。「ヘン」はア段の基幹に後接する場合(カカヘン)とエ段の基幹に後接する場合(カケヘン)がある。「カケヘン」は、本来の形である「カカヘン」が、「ヘン」の影響で母音の逆行同化を起こしたものと考えられる。

- ・さむらいがどないなったんかもわからへん。(侍がどうなったのかもわからない。)(大阪・「百姓のしかえし」)
- ・彦吉は、なんのことやわかれへん。(彦吉は、何のことかわからない。)(大阪・「彦吉とてんぐと」)

ただし、この「エ段基幹+ヘン」の形は、京都方言では可能否定形である。つまり、京都方言において「カケヘン」は「書かない」ではなく「書けない」の意味になる。最近では、大阪方言の中でも、京都方言と連続する摂津方言ではこの傾向がある。

b類動詞の場合、「ン」「ヘン」は型の基幹に後接し、「ヒン」はイ段の基幹にのみ後接する。この「ヒン」は基幹の母音からの順行同化によるものだと考えられる。

- ・起こしても全然{おきん/おきへん/おきひん}(起こしても全然起きない。)
- ・さっきから全然{たべん/たべへん/xたべひん}(さっきから全然食べない。)

また、「見る」「寝る」のように基幹が1拍の動詞は「ミーヒン」「ネーヘン」のように義務的に長呼化される。

- ・子供がなかなか{ねーへん/xねへん}(子供がなかなか寝ない。)

「見る」には「メーヘン」という形もあるが、現在ではあまり使われなくなっている。なお、「メーヘン」は「見えない」という意味でもあるが、両者はアクセントで区別されている(「見ない」高低低低、「見えない」低高低低)。

「来る」の場合、「ン」が後接した「コン」と「ヘン」が後接した「ケーヘン」があるが、新しい形として「コーヘン」がある。これは、共通語形の「コナイ」と方言形の「ケーヘン」の混交形と考えられる(真田1987)。

- ・竹やぶの中で、刀をぬいて待ちうけていた主人は、いっこうに男がけえへんので、待ちぼうけや。(竹やぶの中で、刀を抜いて待ち受けていた主人は、一向に男が来ないので、待ちぼうけだ。)(大阪・「話を買う」)

「する」は「ン」が後接した「セン」と、「ヘン」が後接した「セーヘン」がある。「ヘン」が後接した際に長呼化しているのはb類動詞と同じである。

- ・「三人でこのもちを分けて食うよりは、いっそのこと、ひろい得にせえへんか。」(三人でこの餅を分けて食べるよりは、いっそのこと、拾い得にしないか。)(大阪・「もちあらそい」)

なお、否定形自体の活用は、比較的新しい「形容詞型」と、非分析的な「伝統型」の2種類の型があり、以下のようになる。

	形容詞型	伝統型
非過去形	カカン	カカン
過去形	カカンカッタ	カカナンダ
推量形	カカンヤロ(ー)	カカンヤロ(ー)
中止形	カカンクテ	カカンデ
	カカンカッテ	カカイデ
仮定形	カカンカッタラ	カカナンダラ
なる形	カカンクナル	カカンナル

「形容詞型」は、形容詞と同様に「カッ」や「ク」などを後接させる活用で、比較的新しい言い方である。一方、「伝統型」は伝統形式で、「カカナンダ」のような非分析的な形式も含む。なお、上の表には「ン」の活用を示しているが、「ヘン」でも基本的に同じである。伝統型の非分析的な形式にも、「カカヘナンダ」(過去形)、「カカヘナンダラ」(仮定形)のような言い方がある。ただし、伝統型の中止形で「カカイデ」のように「ン」が「イ」になるのは、「ン」の場合のみで、「ヘン」には起こらない。

- ・留吉らは、はじめはなかなかしょうちせなんだが、おしょうさんに言われて、しぶしぶしょうちすることにしたそう。(留吉らは、はじめはなかなか承知しなかったが、和尚さんに言われて、しぶしぶ承知することにしたそう。)(大阪・「余九郎ギツネ」)
- ・するとどうや、そこには栗毛の馬はおらんで、ちっこいはにわの馬が、ちょこんとつながれていたんやて。(するとどうだ、そこには栗毛の馬はいなくて、小さい埴輪の馬が、ちょこんとつながれていたんだそう。)(大阪・「はにわになった馬」)

丁寧形

丁寧形はa類動詞と「来る」「する」の型イ段基幹およびb類動詞の型基幹に「マス」を後接させた形で、「カキマス」「ミマス」「キマス」「シマス」となる。丁寧形自体は、共通語と同様に「マシタ」(過去形)、「マセン」(否定形)、「マシタラ」(仮定形)のように活用する。また、現在ではあまり使われなくなっているが、のだ形を作る「ネン」「ノヤ」が後接した場合、「マス」は「マン」になることがある。同様の変化は、形容名詞・名詞述語の丁寧形「デス」の場合にも起こる。

・「和泉の久米田池へ行こうとおもって歩いているうちにまよってしもて。なんぎしてまんねん。」(和泉の久米田池へ行こうと思って歩いているうちに迷ってしまって。困っているんです。)(大阪・「大蛇の手紙」)

使役形

使役形は、a類の基幹ア段および「する」の基幹「サ」に「ス」を、b類の型基幹および「来る」の型k基幹「コ」に「サス」を後接させて作る。使役形自体は、a類動詞と同様の活用をする。

- ・金持ちは、それを聞いて、すぐに手伝いの男にいいつけて、子ギツネをつれてこさしたんや。(金持ちは、それを聞いて、すぐに手伝いの男にいいつけて、子ギツネをつれてこさせたんだ。)(大阪・「ギツネにだまされた金持ち」)

受身形

受身形は、動詞の基幹ア段(b類動詞・「来る」では型rのア段「ミラ」「コラ」など、「する」では「サ」)にレルを後接させて作る。なお、受身形自体はb類動詞と同様の活用をする。

可能(肯定・否定)形

可能形は、肯定形と否定形とで形が異なる。また、「カケル」「カカレヘン」などの汎用的に使える形式と、能力可能と心情可能で使える「ヨーカク」がある。まとめると次のようになる。

		汎用	能力・心情
書く	肯定	カケル	ヨーカク
	否定	カカレヘン	ヨーカカン
見る	肯定	ミレル	ヨーミル
	否定	ミラレヘン	ヨーミン
来る	肯定	コレル	ヨークル
	否定	コラレヘン	ヨーコン
する	肯定	《デキル》	ヨースル
	否定	《デキヘン》	ヨーセン

表中の「カカレヘン」「ミラレヘン」「コラレヘン」はそれぞれ「カカレル」「ミラレル」「コラレル」に「ヘン」が後接したものである。つまり、汎用形式においては、肯定形はいずれも型の工段の基幹に

「ル」を後接させて作るのに対して、否定形は受身形と同じ形（型基幹+レル）に「ヘン」を後接させた形になる。可能肯定形自体はb類動詞と同様の活用をする。

- ・竹やぶの道を行ったらはよう上方へ行けるちゅうのんや。(竹やぶの道を行ったら早く上方へ行けるといふんだ。)(大阪・「話を買う」)
- ・「そんなにいばったって、きたない田の中でいばるだけや。だいいち、遠いところへ行かれへんやろ、おまえなんか、井の中のカエルやのうて、田の中のタニシどんや。」(そんなにいばったって、汚い田の中でいばるだけだ。だいいち、遠いところへ行けないだろう、おまえなんか、井の中のカエルじゃなくて、田の中のタニシどんだ。)(大阪・「タニシの負けざらい」)

なお、「する」については、このような形がなく、語彙的に「デキル(デケル)」「デキヘン(デケヘン)」を用いる。

また、動詞の前に副詞「ヨー」をつけて能力可能および心情可能を表す。

- ・それから後、村の人たちの間では、「みのが池には、おとろしいオロチがすんどる。見つかったら、とって食われるぞ。」と言いつたえられ、ながーい間、みのが池には、よう近づかんかったんやで。(それから後、村の人たちの間では、「みのが池には、おとろしいオロチがすんでい。見つかったら、とって食われるぞ。」と言いつたえられ、長ーい間、みのが池には、近づけなかったんだよ。)(大阪・「みのが池のオロチ」)

#### 尊敬形

尊敬形は、a類動詞・「来る」・「する」の型イ段語幹およびb類動詞の型語幹に「ハル」を後接させて作る。京都方言においては、a類動詞の場合はア段の基幹に「ハル」が後接して「カカハル」となるが、現在の大阪方言においてはイ段基幹に接続して「カキハル」となるのが基本である。尊敬形自体はa類動詞と同様の活用をする。

- ・一寸法師の背がぐんぐんのびて、りっぱな男になりはったんやて。(一寸法師の背がぐんぐん伸びて、立派な男になりなされた。)(大阪・「一寸法師」)

#### 親愛形

a類動詞・「来る」・「する」の型イ段基幹およびb類動詞の型基幹に「ヤル」を後接させることで、親愛形を作ることができる。この形は、主語が話し手と同等か目下であることを表すものである。

- ・「祝いもんでっさかい、どうぞ、ひろてきて。」と、むすめは、サルにたのみやった。(「お祝いものですから、どうぞ、拾ってきてください」と、娘は、サルに頼んだ。)(大阪・「サルのむこ様」)

親愛形自体は、a類動詞と同様の活用をする。

#### 軽卑形

軽卑形はa動詞・「来る」・「する」の型イ段基幹およびb類動詞の型基幹に「ヨル」が後接して「カキヨル」「ミヨル」「キヨル」「シヨル」のようになる。また、「トル」も軽卑的な意味を持つが、継続形のところで述べる。

- ・そのあいだにも、若い男しは、「なにしとるんや、やくそくどおり、はよむすめごをくれんかい。」と、しつこくさいそくしよる。(その間にも、若い男は、「何をしているんだ、約束どおり、早く娘をくれ。」と、しつこく催促しやがる。)(大阪・「へびむこ入り」)

軽卑形自体はa類動詞と同様の活用をする。

#### 継続形

継続形は、a類動詞・「来る」・「する」のイ段または音便基幹、およびb類動詞の型基幹に「テル」・「トル」を後接させて作る。「トル」は継続だけではなく軽卑的な意味も表すが、過去形「トッタ」と中止形「トツテ」、仮定形「トツタラ」は軽卑的な意味にはならない。

- ・その池のつつみを旅人が一人でてくたく歩いとった。(その池の堤を旅人が一人でてくたく歩いてた。)(大阪・「大蛇の手紙」)

「テル」も「トル」も基本的にb動詞と同じ活用をする。

#### 希望形

希望形は共通語と同様に、a類動詞・「来る」・「する」の型イ段基幹およびb類動詞の型基幹に「タイ」を後接させて作る。希望形自体は形容詞と同様の活用をする。

#### のだ形

のだ形は、動詞の連体形に「ンヤ」を後接させて作る。「ノヤ」と「ネヤ」もあるが、こちらは否定形など、撥音の直後につくことが多い。また、「トル」「ミル」「クル」「スル」など、連体形が「ル」で終わる動詞の場合、「ル」が「ン」になって「ノヤ」「ネヤ」が後接することも多い(後述の「ネン」も同様)。この場合に「ンヤ」がつくことはできない。活用に関しては、「ンヤ」と「ノヤ」は名詞述語と同様の活用をするのに対して、「ネヤ」は活用しないという違いがある。

また、別の形として「ネン」があるが、過去形には後接できない。その場合は、a類動詞・「来る」・「する」のイ段または音便基幹、およびb類動詞の型基幹に「テン」を後接させる。なお、「ネン」は丁寧形「マス」にも後接する。

- ・ほいで、キツネは、ニワトリを一羽ずつ首にまきつけて、せたらうて、いっこりますねん。(それで、キツネは、ニワトリを一羽ずつ首に巻きつけて、背負って、行きやがるんです。)(大阪・「キツネの目じるし」)
- ・ひとりの女のひとが、たずねてきはってん。(一人の女の人が、訪ねてきたんです。)(大阪・「鈴見の松」)

これら「ネン」「テン」は「ノヤ」「ンヤ」が変化してできたものと考えられるが、常に置換可能というわけではなく、活用できない。また、意味・用法の面の違いもある。

## 2. 形容詞・形容名詞述語・名詞述語の活用の特徴

### 【形容詞】

形容詞の交替語幹は、語幹末母音が a と i の語に存在し、中止形やなる形を作る際に用いる。語幹末母音が a の場合、アカ>アコ(赤い)のように、語幹末母音の a を o に変えて作る。この場合、「アコー」のように長呼されることがある。また、語幹末母音が i の場合は、ウレシー>ウレシューのように、i を yu に変えて作る。この場合は交替語幹に長短の区別はなく、必ず長呼形になる。ただし、語幹末が a や i であっても、交替語幹を使用するか否かには世代差や地域差がある。また、語によって交替語幹の作りやすさが異なる。特に語幹末が i の場合、a の場合よりも交替語幹の衰退が著しい。

### 〈断定非過去形・連体非過去形〉

断定非過去形と連体非過去形は同形で、語幹に「イ」を後接した形になる。

### 断定過去形・連体過去形

過去形も断定と連体で同じ形であり、どちらも語幹に「カッタ」が後接した形である。

### 推量形

推量形は、動詞と同様に断定形に「ヤロ(ー)」を後接させて作る。

### 中止非過去形

本方言の形容詞・形容名詞・名詞述語の中止形においては、テンスの分化がある。形容詞の中止非過去形は、「テ」を後接させて作るが、その際の形には、語幹と交替語幹、の2種類がある。

語幹につく場合は、必ず「アカーテ」のように長呼する。

- ・この本{xあかて/あかーて}目チカチカする。(この本は赤くて目がチカチカする。)

交替語幹につく場合も、必ず長呼形する。

- ・この本{xあこて/あこーて}目チカチカする。(この本は赤くて目がチカチカする。)

### 中止過去形

「テ」は動詞型基幹にもつき、「アカカッテ」のようになる。この形は、中止非過去形といつでも置換可能というわけではなく、過去テンスを含む(高木2000)。

- ・xこの本あかかって目チカチカする。

- ・昨日読んだ本あかかって目チカチカしたわ。

(昨日読んだ本は赤くて目がチカチカした。)

主節のテンスが非過去の場合には基本的に過去中止形は使えない。このことは、形容名詞・名詞述語でも同様である。

### 仮定形

仮定形は、語幹に「カッタラ」を後接させて「アカカッタラ」のようになる。

### 否定形

否定形は、「ナイ」をつけるものと「コトナイ」をつけるものがある。

「ナイ」をつけるものは、「アカナイ」のように語幹につくものと「アコナイ」のように交替語幹につくものがある。

- ・そのころ、萩谷の山おくに、「長賢寺」いう



お寺があつてな、そこのこぞうさんが、ちょっとぬけてて、あんまりかしこないんやが、芥川まで、みそを買いに山をおりてきた。(そのころ、萩谷の山おくに、「長賢寺」いうお寺があつてね、そこの小僧さんが、ちょっとぬけてて、あんまり賢くないんだが、芥川まで、みそを買いに山をおりてきた。)(大阪・「こぞうのみそ買い」)

「コトナイ」は連体非過去形に付く。迂言的な表現方法で、「コトアレヘン(アラヘン)」となることもある。

・「そんなちっこい目ん玉では、こわいことないわい。」(そんな小さい目玉では、怖くないよ。)(大阪・「これでもか」)

なる形

なる形のうち最も生産的なのは、「アカナル」「アカーナル」のような語幹である。この場合は、長呼してもしなくてもよい。

・最近体の調子{わるなつた / わるーなつた}  
(最近体の調子が悪くなった。)

また、交替語幹もなる形として使われるが、作りやすさや使用頻度は語によって異なる。

・おなががいっぱいになったら、ねむとうなるもんや。(おなががいっぱいになったら、眠たくなるものだ。)(大阪・「クマのしっぽはなぜ短い」)

なお、交替語幹は副詞形としても使用される。その際、「ハヨーニ」のように長呼形に「ニ」をつけて言うこともあるが、この形を副詞形として使えるかどうかについては世代差や地域差があり、人によってゆれが認められる。

・今日は{はよ / はよー / はよーに}帰ってきた。(今日は早く帰ってきた。)

・けがしたとこだいぶ{あこ / あこー / ?あこーに}腫れてる。(けがしたところがかなり腫れている。)

丁寧形

丁寧形は断定形に「デス」を後接させて作る。

のだ形

のだ形は動詞と同様に、連体形に「ンヤ」「ノヤ」「ネヤ」を、断定非過去形に「ネン」を後接させて作る。「テン」の場合、「アカカッテン」のように動

詞型音便基幹「カツ」に後接する。

【形容名詞述語・名詞述語】

〈断定非過去形・連体非過去形〉

断定非過去形はどちらも「ヤ」を後接させる。連体非過去形については、形容名詞は「ナ」を、名詞は述語としての形はなく、助詞「ノ」を後接させる。

断定過去形・連体過去形

過去形は断定も連体も同形で、「ヤツタ」を後接させる。

推量形

推量形は「ヤロ(ー)」を後接させて作る。

中止非過去形

非過去中止形は、「シズカデ」「学生デ」のように「デ」を後接させて作る。

中止過去形

形容名詞・名詞述語にも過去中止形があり、「ヤツテ」という形になる。

・あいつ今まだ 19 歳{で / ×やって}選挙権ないねん。(あいつ、今はまだ 19 歳で選挙権がないんだ。)

・あいつ去年まだ 19 歳{で / やって}選挙権なかったん。(あいつ、去年はまだ 19 歳で選挙権がなかったんだ。)

仮定形

仮定形は「ヤツトラ」を後接させて作る。

否定形

否定形は「デナイ」「ヤナイ(ヤアレヘン)」「トチガウ」の3つに分けられる。「デナイ」は、「デ」と「ナイ」の間にとりたて助詞が入ることができる形である。形が似ているが、「ヤナイ」にはそれができない。

・普段はそんなに静か{でもない / ×やもない} (そんなに静かでもない。)

「ヤナイ」は「ヤアレヘン」にもなる。「トチガウ」は動詞「違う」に由来する形式で、「ト」が省略されたり、「チガウ」が「チャウ」になったりもする。

・「あのときの坊さんな、あれどこかのえらい仏さまのお使いやつたんちがうやるか。ひよっとしたら、そのたたりやで。」(あのときの坊さんね、あれはどこかの偉い仏様のお使いだったのではないだろうか。ひよっとし

たら、そのたたりだよ。)(大阪・「ならずのナツメ」)

- ・あの犬チャウチャウ(と) ちゃう。(あの犬はチャウチャウではない。)

なる形

なる形は「シズカニ」「学生ニ」のように「ニ」を後接させて作る。「なる」が続くので、「ニ」は「ン」に変化して「シズカンナル」「学生ンナル」と言うことが多い。

丁寧形

丁寧形は形容詞と同様に「デス」を後接させて作る。

のだ形

動詞・形容詞と同様に「ンヤ」「ノヤ」「ネヤ」「ネン」を後接させる。ただし、「ンヤ」が後接する際には「ナンヤ」のように連体形「ナ」に続き、「ネヤ」「ネン」の場合は「ヤネヤ」「ヤネン」のように断定形「ヤ」に続く。形容名詞述語・名詞述語の場合には非過去形・過去形を問わず「ノヤ」は使用されない。

- ・あ、あんた明日当番なんや。(あ、あなた明日当番なんだ。)
- ・あ、あんた明日当番やねや。(あ、あなた明日当番なんだ。)
- ・あんなー、私明日当番やねん。(あのね、私明日当番なんだ。)

なお、過去形には「ネン」は後接できず、「ヤッテン」

となる。

- ・私昨日当番やったんや。(私昨日当番だったんだ。)
- ・私昨日当番やってん。(私昨日当番だったんだ。)

用例出典

大阪：大阪府小学校国語科教育研究会「大阪のむかし話」編集委員会編(2005)『読みがたり 大阪のむかし話』日本標準

参考文献

郡史郎編(1997)『日本のことばシリーズ 27 大阪府のことば』明治書院

真田信治(1987)「ことばの変化のダイナミズム 関西圏における neo-dialect について」『言語生活』429

高木千恵(2000)「大阪方言におけるテ形について 形容詞・名詞述語・動詞否定形式のテ形(相当)形式」『阪大社会言語学研究ノート』2 大阪大学大学院文学研究科社会言語学研究室

山本俊治(1962)「大阪府方言」榎垣実編『近畿方言の総合的研究』三省堂

山本俊治(1982)「大阪府の方言」『講座方言学 7 近畿地方の方言』国書刊行会

(野間純平)